

歴史は語る

2012年1月18日発行 第4号 編集責任者 青田 勇

東海教区(元ELC・福音ルーテル教会)の初期のことなど

西恵三(保谷教会)

神のなされることは皆その時
にかなって美しい。(コヘレトの
言葉 3章11節)

「ルーテル学院百年の歴史」の
中で、石居正己(ルーテル学院大
学・神学校名誉教授)が一九五
〇年に挙行された日本ルーテル
神学校再建について触れ、「四月
十六日午後二時半、開校礼拝が
行われた。司式は山内六郎、説教
者はウイテルで、博士はエルミ
ヤ二章によって壊れた水ために
ならぬようにと熱意あふれる説
教された。」と記して居られま
す。

この開校式に私はELCが日
本伝道を開始された直後に最初
の宣教師オラフ・ハンセンと共
に出席し、「預言者の召命」と題
された説教に深い感銘を受け、



最初の宣教師 オラフ・ハンセン (Rev. Olaf Hansen)

ルーテル神学校と教会との付合
いが深まることになるのです。
その説教中に私にとっては忘
れられないハブニングが起り
ました。ウイテル博士が説教
中に突然説教台の右上にあつた
時計に気付き、少し微笑みなが
ら「さいわいなことに私の時計
はとまっています。」と息継ぎを
されたのです。これは自分でも
すこし熱が入り長くなりつつあ
ることに気付いての発言になつ
たと拝察したのですが、その瞬
間私は有名なゲーテのファスト
の中にある一句(Werwelle doch
「留まれ」…: Du bist so schön.
お前はいかにも美しい。相良守
峰訳)を思い出したのです。

クリスチャンホームに生ま
れ、福井県大野市にあるカナダ
メソジスト系の旭幼稚園を経て
大阪ルーテル教会日曜学校に熱
心に出席し、戦争中は旧制高校
の時代には大変苦しい信仰生活
を続け、一九四九年(昭和二十
四)東京大学で天文学を研究す
る第一歩を踏み出したのです
が、全く幸運なことに本郷西片
町所在の「同志会」という聖公会
系の学生寮に入寮が許された生
活が始まりました。これらのこ

とに關してはかなり詳しく既に
日本福音ルーテル教会百年史論
集 第一号、第二号、第三号、第七
号(これは掲載予定でしたが発
行されていませんが、拙著「星よ
輝け牛田山」に掲載されていま
す。在寮中に南原繁(私の入学式
の時の東大総長)や矢内原忠雄
(卒業式の時の総長)等有名な
方々が慣例の金曜日講演して
下さったのですが、私も早速ハ
ンセンにも来訪頂いたし、EL
C初期の宣教師の方々にバイブ
ルクラスの指導をお願いしたの
です。

ド大学やロックフェラー財団等
アメリカからの多大の援助のあ
つたことを耳にして大変興味を
示されました。

青田牧師が静岡教会の月報で

二つの提案の中の一つは、東
大の近くにあるルーテル本郷教
会の学生集會に、もう一つは夏
に行われているバイブル・キャ
ンプです。二〇〇八年十月十八
日に前橋にある共愛学園創立百
二十周年の折「私は第一回目の
山中湖のYMCAキャンプ場で
のキャンプに出席しました。」と
言つて名刺を下さいました。塩
崎立夫氏で高崎ワイズメンクラ
ブとありました。

書かれた「東海教区前史」の中に
日本に於ける伝道開始に向けて
の視察・調査の任にあつたEL
Cボード総幹事シルダール
(R.A.Syrdal)のことが記せられ
ています。彼は私とハンセン
とが東京一名古屋間の多くの都
市を視察・調査して伝道開始の
四候補地に目安がついた頃に再
来日し、私共の大調査旅行と
なつたのです。その折将来の日
本を担う若い人々への伝道に話
題が及んだ折二つ提案を示す中
で、東京大学のキャンパスを案
内することになつたのです。勿
論安田講堂では昔天行幸の折
の控室とか入学・卒業式で用い
られる大講堂、その外多くの施
設の中でも関東大震災で被害を
受けた中央図書館にはハーバ

この共愛学園での教え子数名
が最初の宣教師の方々のヘル
パーとして働くことになつたの
ですが、その中の一人須田清子
さんは東京衛生病院で看護婦と
しての資格を得て、長くブラジ
ル伝道の助けをされたのです。
一九五〇年秋頃から静岡教会
の土地選定には同志会先輩の望
月庄次郎氏に、島田教会では市
山家の方々、浜松教会では父の
同志社大学神学部の後輩柳田秀
男牧師の御世話になつた。また、
一九七九年には名古屋恵教会で
持たれた宗教改革記念礼拝で若
き日の平岡さん(現保谷教会牧
師、神大講師)が出席された由。

正に「神のなされることは皆
その時にかなつて美しい」こと
を噛締めています。

静岡教会が始まった頃

名古屋めぐみ教会会員

犬飼通之

一九五〇年の春、アメリカミネ

ソタ州に本部を置く「福音ルーテル教会」日本伝道部は東京文京区に礼拝所を開いて宣教活動を開始した。その年の秋には、東京・名古屋間に当初設立を予定した四つの教会（静岡、島田、浜松、名古屋）それぞれの責任宣教師が東京に到着した。私はそのうちのお一人、フィリップ・ハイランド師が東京



P. ハイランド宣教師一家

で日本語勉強中に始められた聖書研究会に出席していたことから、その後師が静岡教会を設立される時にお手伝いをするということになった。大学生であった私は週末に東京から静岡に通い、建築会社との打ち合わせ、聖書研究会、礼拝が始まってからは、礼拝説教などの通訳をした。一九五一年の夏休みには次期教会設立候補地を探すため、静岡県内を他の宣教師先生と巡回した。

この宣教団を送り出したEvangelical Lutheran Church (ELC) という教会は、一九世紀の中ごろから終わりにかけてノールウエーからアメリカに移住した人達によつて作られた教会組織であった。日本伝道開始初期に来日した宣教師の大半はアメリカに移住した人達の子供、即ちノールウエー系二世であった。私はハイランド師のお手伝いをしていた関係でご家族と一緒に過ごす時間が多かったが、家庭の中では、「有難う」は「トウーセンタック」、「おや、まあ」は「ウフタ、メイヤ」というふうになノールウエー語も飛び交っていた。

ハイランド夫人は独身時代の一九四〇年、宣教師として中国に向かったが、日中交戦の深刻化によりフィリッピンで一待機することとなった。その後太平洋戦争が勃発、フィリッピンに進攻した日本軍によつて強制収容所

に入れられるという体験の持ち主であった。



ハンソン婦人宣教師

そのような背景を持つご夫人であったので、聖書研究会ではご夫人も一緒に教えて下さった。米国で高校の国語教師をしておられた夫人は、シェイクスピア劇中人物の罪の意識を聖書に関連して解説されることなどもあり、文学的な刺激を受けることも多かった。

この時期は第二次大戦終了後五年しか経っておらず、まだ戦争の影が色濃く残っていた。五〇年秋に来日した一団の中には大戦中軍人さんだった女性宣教師もおられた。静岡教会にハイランド師と共に配属された女性宣教師リディア・ハンソン師は日中交戦（日支事変）中、中国で宣教活動をしておられた人だった。全くの偶然であるが、静岡市に鈴木宏さんという、兵隊として中国に駐屯していた時にこのハンソン師と知り合いだった人がいた。

鈴木氏は中国の駐屯地で、その地域の外国人の動静を監視する班に所属していた。そこにルーテル

二十周年を迎えることはなかった。

それ以上に、中堅信徒を多く育て、東京、静岡、名古屋、岐阜を結ぶ東海道線沿線に次々と建てられた宣教教会を横に結び合わせ、強い連帯感を持つ「教団」にしたのである。その意味で、その後設けられた「梅ヶ島ハイブルキャンプ場」と共に、多くの信徒、求道者が、さまざまな形で交流する場となったことから、振り返れば、「学院」の設立は極めて「戦略的」なことであった。その学院は、「時」の流れに抗せず

ところで、私は学院の二期生の一人であり、良き「戦友たち」を得た。若き魂たちの人格形成に学院が果たした役割には大きなものがあった。私は学院がなければ、高等卒で就職せざるを得なかった。学院は、学費、寮費、食費を与え、さらに、午後は学院内のアルバイトをさせてくれたのである。夏休みには、小さいとはいえ、

建物は、本館（二階建て一階に事務室と院長室と教室が一つ、二階は教室が一つと図書館であった）、男子寮と女子寮、食堂、それに院長住宅と教授住宅が一つ、それですべてであった。木造の質素な校舎であった。

しかし、この学院は、現在の日本福音ルーテル教会東海教区の前身である「東海福音ルーテル教会」を生み出すという「神の国建設事業」の拠点となり、「礎」（いしずえ）となった。その設立目的は、「中堅信徒の養成」ということであり、副産物としては神学校に進む者を輩出したが、



東海聖書学院 第二期生 1955

学院は、その名のとおりに、聖書各書の概説、教義学、教会史、比較宗教学、キリスト教教育、讃美歌などの課目を教えた。伝道活動の実習もあった。初歩的な勉強であったが、聖書

教会の宣教師ハンソン師が居られた。鈴木氏によると、氏は調査の一環としてハンソン師の伝道所を時々訪れていたが、そこで聖書の話を聞いたりポータブルオルガンに合わせて讃美歌を一緒に歌ったりしていたとのことである。又小さな英語の聖書ももらったとのこと。私たちが知らされている戦地の様子とは大分違った状況がそこにはあったようである。鈴木氏は戦前の前線に移動することになった時、ハンソン師に将来日本に来られることがあったらお会いしましょうと言つて別れたとのことである。

戦後、静岡で貿易会社に勤めていた鈴木氏が、一九五一年正月ジャパン・タイムズを読んでいたところ、BC 日本伝道部が宣教師の任地を決めたという記事が目に入り、静岡の担当としてリディア・ハンソンという名前が記されていた。鈴木氏は早速問い合わせをしたところこれが中国の駐屯地で知っていたハンソン師に間違いなことが分かり、十二年ぶりの再会を果たされた。このおかげでハイランド師とハンソン師は地元で鈴木氏という強力な支持者を得ることとなった。教会建設の敷地選定に鈴木氏の助力を得、また、会堂完成前の早い時期から鈴木氏宅で聖書研究会を始めることが出来たのである。

の「みことば」に親しむ絶好の時間を与えられたことは、感謝である。

近隣の人々との交流も多少あった。人々の好奇心の目が注がれることを感じることもあった。学院は後の古庄教会（現・静岡教会ひかり礼拝所）に発展していったのである。

東海福音ルーテル聖書学院への道 〜古い聖書〜

水野登美子(豊中教会)

今、私の手元には一九四六年改訂版の英語の新約聖書があります。これは私の宝物です。これがないかったら現在の私は存在していません。当時、私は英文科の学生でした。同じ学部の人々が、滋賀県近江八幡市から京都まで通学していました。彼女は熱心なキリスト教徒の家に育ち、一方、私は大阪北部の田舎生まれ、古い仏教の家で過ごしていました。

彼女は一九五三年の夏（今から約六〇年前のこと）、琵琶湖畔でのキャンプ場に私を招いてくれました。そして、その夜は彼女の家に泊らせて頂きました。翌日の午後、隣家の方でアメ



聖書学院正面

リカ婦りの人が、後輩の私たちをお茶に招いてくださったのです。そこは今でも超モダンな近江八幡の異人館でした。大きな応接間と水洗トイレ、バスのある西洋館でした。ゆつたりお茶を頂き、珍しいアメリカの話や、吉田先生の妹・孝子さんのこと、また、これからは英語を勉強すべきだと熱っぽく語られました。皆、同志社ファミリイという感じでした。帰りに一冊の聖書を下さいました。裏表紙には『我を強くし給う者によって凡てのことをなし得るなり』ピリピ4:13 1993'8'18



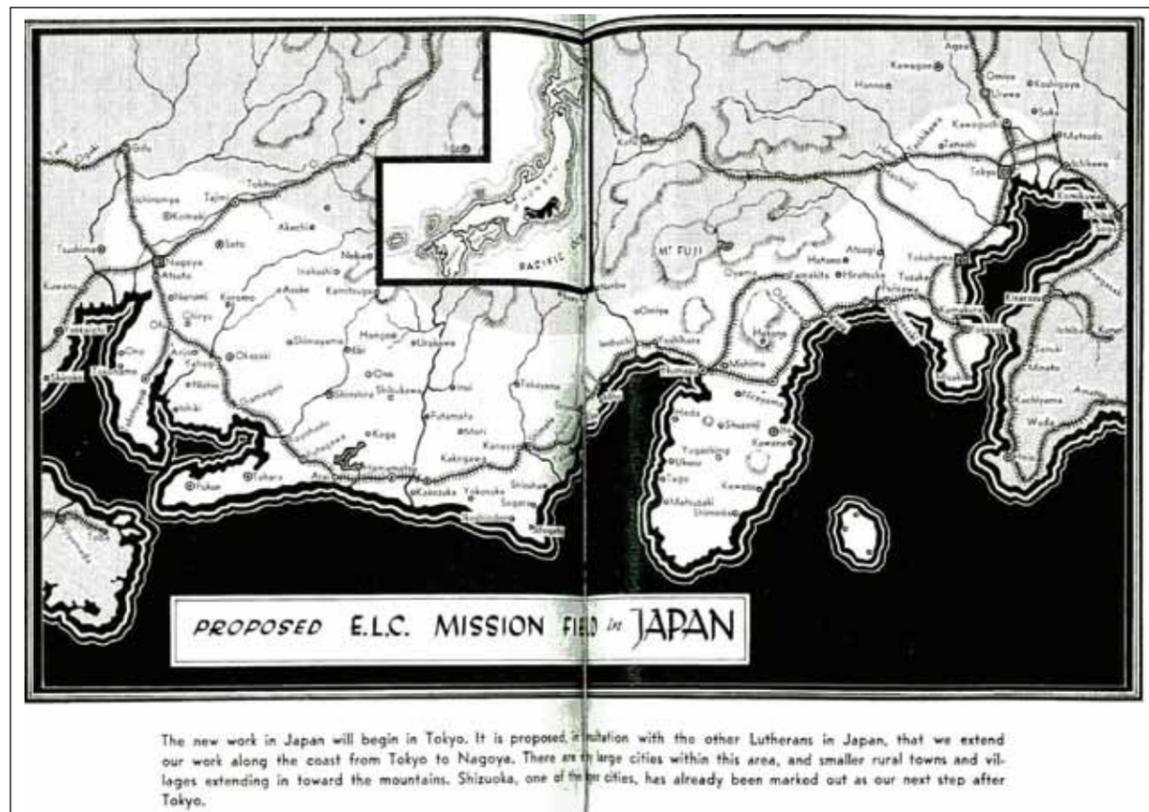
最初の牧師 左から河島、岸井、大柴、池田

「福音ルーテル教会(E L C)日本伝道部」初期の歴史(1950～ 1952)

年	月・日		年	月・日	
1949	2.23	ELC(福音ルーテル教会)、日本伝道開始を決定。		7～8	ルーテル自由教会(LFC)のボードから派遣されたO・バーグとA・クヌートソンが来任。
	4.16～5.8	ボード総幹事R・A・シルダ、日本伝道視察。		8～9	Rev.P. アルノルド、Rev.C・アーモット、Rev.J・ホームスタッド、Rev.D・ヴァンジ、Rev.N・オルソン、
	6.23	ボード、日本伝道を東京から名古屋の地域に決定。		8.10	Rev.L・ダヴィドソン、婦人宣教師M・ハンソン、A・グリック、C・モスピー、M・マイヤーワールドが来任。
	11.1	初代宣教師Rev.O・ハンセン、ミネアポリスより出立。		10.21	野尻湖にてルーテル文書協会(LLS)を設立し、O・ハンセンが議長となる。
1950	1.14	ハンセン家族、婦人宣教師B・ボイヤムとL・ハンソン、サンフランシスコから出立。		10.21	名古屋礼拝開始(10.21)。島田礼拝開始(11. 4)、浜松礼拝開始(11. 18)
	3.14	初代牧師・河島亀三郎牧師、東京福音ルーテル教会(現・小石川教会)に着任。		10.28	名古屋にて、ルーテルアワー放送開始。
	4.2	東京福音ルーテル教会(文京区林町71、現・小石川教会)で最初の礼拝を守る。		11.25-28	「学生センター」(東京・小石川)、半田、岡崎、焼津、富士、沼津での伝道を決定。
	9.5	Rev.P・ハイランド家族、Rev.O・G・タンク家族、Rev.K・ステンバーグ、		12.25	静岡で初の受洗者、鈴木宏(宣教師館にて)。
		婦人宣教師A・M・ミッチェル、D・オフスダル、L・ピーダーセンの11人が日本に到着。	1952	3.30	静岡教会(30日午前)・島田教会(30日夕)献堂式。
	9.22	Rev.L・ジョンスロード家族が日本に到着。		7.1	東京福音ルーテル教会(現・小石川)教会規則を定め、最初の教会となる。
	9	最初の小教理問答クラスが始まる。		7.13	名古屋恵教会(午前)・浜松教会(夕)献堂式。
	10	福音ルーテル教会(ELC)とルーテル自由教会(LFC)の両ボード協同伝道計画を結ぶ。		8	Rev.L. イングスロード、Rev.P. ルティオ、Rev.R. ネルソン、Rev. R. サンデン、Rev.D. スウェンサイド、
	11.27-29	東京で第一回宣教師会を開催。静岡、島田、浜松、名古屋での伝道開始を決定。			Rev.P. アルノルド、Miss A. アルネソン、Miss M. プリングル、Miss R. ハーブスト、Miss F. マイホルドが来任。
1951	1.24	P・ハイランドが静岡で伝道を開始。		8.29～9.5	山中湖YMCAにて夏の宣教師会議と第一回バイブルキャンプ開催。
	2～3	静岡・音羽町、土地購入(宣教師館と会堂用)。名古屋南区新効通、土地購入(会堂用)。		10.5	半田、焼津伝道開始。
	3.25	東京福音ルーテル教会で最初の6名が受洗。		11.9	岡崎伝道開始。
	4.10	ELCの宣教師団体の正式名称を「福音ルーテル日本伝道部」と定める。		11.30	沼津伝道開始。

注：「福音ルーテル教会日本伝道部」は「東海福音ルーテル教会」（1958年1月）を生みだした宣教師母体である。さらに、「東海福音ルーテル教会」は1963年5月に日本福音ルーテル教会と合同し、東海教区に改組される。

E L C 宣教計画、日本伝道地図



出たいと話しました。すると数年後、東京での仕事を紹介して頂き、小石川教会へ出入りして、受洗し東海福音ルーテル聖書学院へ行くことになりました。

どうして？今でも不思議なのです。学院ではみことばを学び、CS教授法や、いろいろ勉強しました。宣教師と二人でよく家庭訪問や病院訪問しました。同期の男性はみんな三鷹の神学校へ行かれましたが、今は定年退職しておられます。特に、クラスメイトとして特記しておきたい方は、日本福音ルーテル教会の最後の伝道師、大橋孝子姉です。彼女は知多半島の多くの教会で、身を粉にして働かれました。特に、日曜学校で教えられたことで有名です。

東海福音ルーテル聖書学院は信徒教育に力を入れられたと思います。卒業生は各地の教会で、主から与えられた賜を生かして、良き働きをしていると思います。それが聖書学院の使命であったと思っています。

一補足
吉田希夫は、一九一七(大正六)年十月四日、吉田悦蔵と清野の長男として誕生した。父の吉田悦蔵は、W・M・ヴォーリス、村田孝一郎と共に近江兄弟社の創立者の一人である。吉田希夫はアメ



聖書学院教師

リカのニューヨーク聖書神学校での二年間の学びを終了し、一九五一年五月に卒業した後、九月より、一年間、ミネソタ州セントポールにある福音ルーテル教会(ELC)の神学校 Luther Seminary で神学の研鑽を積み重ねた。一九五二年八月にELCのボードより、レインクスルード、Pルティオ、R・ネルソ、R・サンデン、D・スウェンサイドなど夫人も含めての十五名の宣教師が日本宣教のために派遣された。彼らは汽船『PRESIDENT CLEVELAND』にサンフランシスコで乗船し、八月十五日に横浜港に到着した。その同じ汽船に吉田も乗船し、約三年間の留学を終えて日本に帰国した。二年後の一九五四年四月から五年間、開校した聖書学院に週三日間、吉田は最初の日本人教師として聖書を学院生に教えた。

婦人宣教師B・ボイヤム
『聖書学院献堂式について』

東海ルーテル聖書学院の栄えある献堂式に出席した、婦人宣教師B・ボイヤムは、将来に向けての聖書学院の期待と憧憬に胸を躍らせながら、ELCが発行した、一九五四年九月号『Missionary』に、その感慨をこのように書き送っている。

「この地に聖書学院が実現するための祈りが現実のものとなった。教師陣と十人の学生が一週間半、活動中である。昨年十一月の歛入れ式から、さらには三月に行なわれた聖書学院の理事会の時と比べて、その場所はいかに変わっていることをすべての人が認めるに違いありません。建物のデザインは確かに単純であるが、静岡市の郊外である古庄の土地には、事務室と教室、二つの学生寮、食堂、管理人室、それに小さな日本人用住宅が建っている。日本伝道の初期に、このような最初の施設を作ってくれた神とアメリカの教会員のために心から感謝をしたい。……」

多くの日本人と宣教師が始める讃美歌を高らかに歌う中、P・ハイランドとJ・ホームスタッドにより、定礎式が行われた。事

務室がある一階の、礼拝用として用いられる大教室には会衆を収容できなかつたために、隣の食堂と入り口にも多くの人が立っていた。

静岡教会と島田教会の聖歌隊と東京から来た男性の四重奏により、讃美の歌が奏でられた。聖書学院院长P・ハイランドと宣教師会長J・ホームスタッドが司式に携わった。日本福音ルーテル教会総会議長牧瀬雄吉と最初の宣教師会長O・ハンセンにより、神の言葉が語られた。東京の河島牧師、静岡の池田伝道師、それに聖書学院の教師となる吉田希夫らが聖書朗読を行った。日本福音ルーテル教会、日本ルーテル神学校、神戸聖書学院、静岡の近隣の教会からの挨拶があった。さらに、R・A・シルダ博士、ミニアポリスにあるルーテル聖書学院「Cannose Lutheran Bible School」からのお祝いの書状が届いた。また、この時期、日本を訪れていたA・R・ラインからも東洋での聖書学院の普及を喜ぶ祝辞が寄せられた。彼はボードの理事の一人であ



聖書学院献堂式 1954年4月29日

る。感謝状が設計士と建築業者に渡された。最後に、約二時間半、お茶とケーキが振舞われた。一部の人々は電車に乗り遅れないために慌ただしく立ち去ったが、その他の人々は夕方まで残っていた。数人の人々は、次の日にバイブル・キャンプの調査に行くために、そこで一晩を過ごした。

このように、四月二十九日はミッションにとって歴史的な日となった。『主が定められた日』として祝されるべきである。今から始まる聖書教育の宣教により、日本伝道を支える優れた信徒の多くが生み出されることを期待している。」

E L C ボード 総幹事 R・A・シルダルの日本視察

青田 勇

アメリカの「福音ルーテル教会」(Evangelical Lutheran Church 以下、E L C) から派遣された最初の宣教師はオラフ・ハンセン (Rev. Olaf Hansen) である。彼は一九四九年十一月五日、東京・羽田飛行場に到着している。

当時のアメリカにおける最大のルーテル教会は、ドイツ系を中心とした U L C A (北米一致ルーテル教会) であり、会員数は 1,919,822 人。次に、ミズリー・シノッドは生粋のドイツ人の教会で、第二番目の規模を誇り、1,617,692 人。そして、E L C (福音ルーテル教会) はノルウェー人系の教会で 772,863 人であった。さらに、一九五〇年より、山陽地域に伝道を展開することになるオーガスタナ・シノッド (アメリカ・



ボード総幹事 R・A・シルダル (Rolf A. Syrdal)

スウェーデン系) は、432,329 人を有していた。

オラフ・ハンセンが日本に來日した八カ月前の、三月三〇日、E L C の常議員会はミネアポリスの本部で「中国で伝道活動が非常に困難な状況になったので、派遣されている多くの宣教師を引揚げさせる」、「ボードが日本とフィリッピンにおいて、宣教師を派遣することが可能と判断するならば、その実行を承認する」との歴史的な海外伝道の決議を行った (Board of Foreign Mission of E L C, 1949.6)。

この E L C の決議に基づき、日本とフィリッピンという二つの国における伝道調査という重要な使命を託されたのは海外伝道局の総幹事 R・A・シルダル (Rolf A. Syrdal) である。彼は、「聖木曜日」の四月十四日午後三時、ミネアポリス空港を発ち、空路を乗り継いで四月十六日の土曜日に羽田に到着した。空港には、U L C A の宣教師とスタイワルトとクヌーテン、それに日本福音ルーテル教会の議長平井清と青山四郎が彼を出迎えている。 (Lutheran Herald, 1949.6.26)

ルが訪ねた都市は、東京、名古屋、京都、大阪、神戸、広島、熊本、新潟、それにフィンランド・ミッシヨンの伝道地である信州の諏訪であったと思われる。

シルダルは日本視察の後、沖縄と香港に立ち寄り、さらにフィリッピンのマニラに五月十九日夕方方に到着し、五月二十八日まで滞在し、フィリッピンでの伝道視察を行い、帰国の途に着いている。そうすると、フィリッピンには約十日間滞在したことになる。

シルダルが帰国して、約一ヶ月後の六月二十三日、E L C の海外伝道局は未知の世界への伝道の期待と憧憬に胸を躍らせながら、ミネアポリスにある教会本部に参集し、「シルダル視察報告」に基づき、「日本伝道事業決議」、「宣教師人事を採択した。その「日本伝道事業決議」は、以下の通りである。

「決議一：『日本での伝道を行う』」 「決議二：『シルダルの提案に従い、日本にある U L C A の宣教師会との協力関係を基本にしつつ、次の地域において伝道を開始することを承認する。

(一) 東京から名古屋、(二) 神戸から下関。』」

さらに、三ヶ月後の九月二十九日に、E L C と U L C A の間で、日本伝道に関する共同会議が開かれ、オーガスタナ・シノッ

ドの代表もそこに陪席し、次のような協約書が E L C と U L C A の両ボードの間で交わされた。「E L C による日本伝道の目的は、日本に一つのルーテル教会を形成し、それを発展させるために他のルーテル・ミッシヨンと共に共同伝道を実施することにある。

」その目的に従って、E L C は日本福音ルーテル教会及び関連諸施設と共に共同伝道を計画する。ただし、その計画は各々の宣教師会とボードの決定に基づいて行うこととする。

共同ルーテル日本委員会 (A Joint Lutheran Committee) は、日本伝道について協議するため、各々のボードから二名の代表者をもって構成する。この委員会は伝道の現場からの必要性と日本の教会からの要請を検討することを目的として、定期的に開催される。なお、最終的な決定は、関係ボードの承認を得るものとする。

\$ E L C の宣教師は、E L C のボードの管理下に置かれる。E L C と U L C A の宣教師が日本伝道に関する課題のために相互に交わり、研修と学びの時を持つために少なくとも年に一度、ルーテル宣教師会議を開催することを強く要望する。

% E L C は在日のルーテル宣教師会と日本の教会の指導者が相

互に理解したことに従って、東京から名古屋の地域を伝道地域として責任をもつて設定する。」

このようにして、「東京から名古屋の間の地域」(東海地方) を E L C の宣教領域とする伝道方針を含んだ共同伝道計画の協約書が E L C と U L C A のボードの間で交わされ、翌月の十月十八日から開かれた E L C のボード会議で正式に承認された。

これは日本でのルター派教会による共同伝道の開始を告げるものであり、十四年後の、一九六三年の日本福音ルーテル教会と東海福音ルーテル教会の合同の実現もここから導かれたと言える。



E L C 海外伝道局ボードメンバー (ミネアポリス)